

## 極小粒の紫黒米新品種「紫こぼし」

### 研究のねらい

近年、食の健康志向や多様化を背景として有色米品種が各地で栽培されており、紫黒米ではモチ品種の「朝紫」が幅広く活用されている。一方で最近、特徴的な食感をもつ極小粒ウルチ品種の「つぶゆき」が育成された。そこでさらに、モチ性で、食感が特徴的な極小粒の紫黒米品種を育成し、利活用の拡大を図る。

### 成果の内容

- ①「紫こぼし」は、出穂期と成熟期が“早生の晩”で、極小粒の紫黒米モチ品種である(2008年品種登録出願)。
- ②短強稈で倒伏に強く、脱粒しにくいいため、一般品種と同様に機械化体系での栽培が可能である。生育期間を通して葉の縁が紫色であるため、一般品種との識別が容易である。
- ③粗玄米収量は「朝紫」の約7割と低収であるが、極小粒の「つぶゆき」とは同程度である。玄米粒長および粒幅が短く、玄米千粒重は「朝紫」の約5割、「つぶゆき」の約7割と極めて小さい(図1)。
- ④玄米に色素成分のアントシアニジンを含み、「朝紫」や一般モチより食物繊維、カルシウム等を多く含む(図2)。



図1 玄米(左:紫こぼし 右:朝紫)

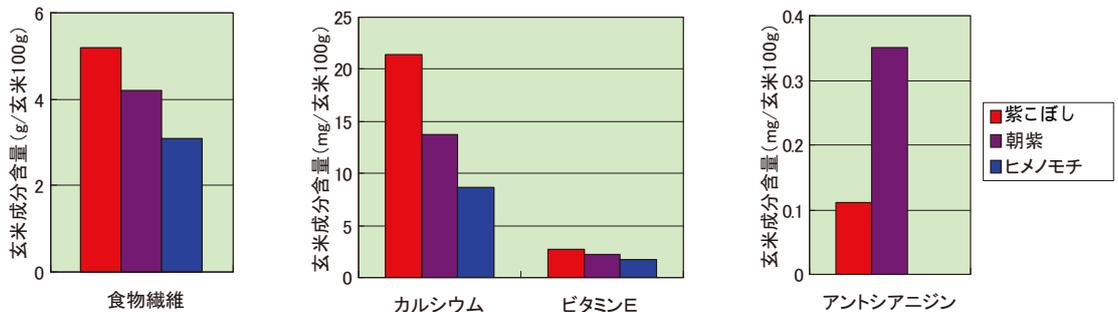


図2 玄米成分含量

(2007年育成地産、日本食品分析センターによる分析)

### 成果の利活用

- ①着色飯や雑穀飯をはじめとする調理飯のほか、多様な料理や加工品の素材としての利用が期待される。
- ②一般品種への混入を防ぐために、播種、移植時に種子や苗の混入に注意するとともに、収穫時、脱穀調製時にも専用機械を用いる等の対策が必要である。また、出穂期に近い一般品種の周辺では、自然交雑の可能性があるので注意する。
- ③登熟期が高温になる地域では、玄米の着色が悪くなる恐れがあることに留意する。

